平成 18 年 12 月 13 日

北関東会場

於：シムックス

中斎塾準備フォーラム　第 5 回講話

中斎塾フォーラムの目的について申し上げます。

中斎塾フォーラムは来年の 4 月 1 日にスタートする予定でおります。

今は準備フォーラムです。

私共は自分が何かをしなければならない時に、判断を常に迫られます。

会社を経営している場合、家庭・地域それぞれの場所において、即座に結論を出さなければならない時、どう判断すれば良いか困る事があると思います。

判断をする場合の判断基準を、身に付けて戴きたいというのが第一の目的です。

そのためにはどうしても経営哲学なり、人生哲学が必要です。

人生哲学の根幹にあるべきもの・・・。

私は＜足るを知る＞という考え方が、これからの世の中に是非とも必要なものだと思います。

＜足るを知る＞という考え方をずっと突き詰めていくと、今の日本の混迷も救われるし、ひいてはアジア全体、そしてヨーロッパを巻き込んで世界全体が救われる事に通じるものの考え方ではないかと思っています。

この「知足」をベースにして、＜本質・大局・歴史＞の「判断の三原則」に基づき、現代の時代の洞察をしていきたいと考え、中斎塾をスタートさせたいと念願し、実行させて戴く事に致しました。

では、本日の講話に入ります。

最初に素読の体験をして戴きます。

お手元のレジメをご覧下さい。

素読は三つルールがございます。

１．背筋を伸ばします。

２．目線を定めます。まっすぐ前を向いて、目線は若干高めにして下さい。

３．氣持ちの良い声を出します。

（素読）

吾十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、

五十にして天命を知り、六十にして耳順う、

七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず

この文章は有名でございます。

少し解説を致します。

二十代が書いてありませんが、氣付かれましたか。

二十代は好き勝手な事をしても良い、と私は理解しています。

二十代が書いていないという事に着目する能力があるか。

文章は書いてあるものを読んで、それを理解するだけでは足りません。

どうして書いてないのか、不思議に思う読解力が必要です。

そういう読み方を「眼光紙背に徹する」「行間を読む」と言い、別の視点で言えば「不立文字」という言葉で表されます。

三十代は大体皆さん家庭を持って、独立をして自分の力で収入を得るという状況になります。

四十代は、迷いっぱなしの年代が普通だと思います。

ただ何となく明るい兆しが見えてくるのが四十代です。

大体この方向に進んでみようと思えれば、四十代はよろしいと思います。

五十代になると、自分が今までやってきた仕事をずっとやっていこうと思える。

自分の実力を発揮するものは、大体この道だな・・・と定まっている。

六十代は色々と人様の話を聞いた時に、“これはおかしいぞ”と思っても、口には出さずに受け止めて、その人間の性質をよく見定めて、その性質に合わせながらふわっと穏やかに返してあげる。

七十代は、自分のやりたい事をやりたいようにやって、しかも社会の規範を破らない。

とまあ、そのように受け止めております。

陽明学の一言を申し上げます。

「知行合一」・・・知るは行いの初めにして、行いは知るの成れるが也。

知識と智恵は、何が違いますか？

知識は教わった事。

本に書いてあるものを読んだり、人様から教わったもの。
自分が実行できようができまいが、一切関係ありません。
ただ記憶にあるかどうか、知っているかどうかという事です。
知っていれば「知っている」と言える。
一知半解（知ったかぶり）という言葉がありますが、聞きかじりでも良いのです。
智恵とは、我がものとなった知識です。
実際に人様の役に立った知識や、行動の裏付けがある知識は、もう知識とは言わないわけです。
智恵とは、その人が活き活きと行動できる源になります。
それが昇華して来ると、＜般若の智恵＞という、人間の心の奥の方から沸きあがってくる「人様のために・・・」という心が含まれてくる智恵になります。
＜般若の智恵＞とは、より真実なるものを追い求めた智恵です。
陽明学は行動をする学問であると何度も申し上げています。
行動哲学です。
その中で「知行合一」という言葉は、非常に重要視されている言葉です。
やってみなければ分からない、まず行動しなければわからない、とお考え下さい。
知行合一のポイントは、体験するかどうかです。
例えば震度 6 の地震がきたとします。
想像だけでは、頭の中が真っ白になりますから、とても対応できないはずです。
では、どう対応するか・・・。
ここで肝心なのは、消防署などで疑似体験させてくれますから、是非体験するべきです。
実際に震度６を実感すると、さて何をしなければならないかが身体で分かる。
知識の場合は、「机の下にもぐりましょう」とか、「火を消しましょう」と読んでいても、現実にはパニックになってしまいます。
しかし実際に疑似体験していれば、その知識は智恵に変わってくるので動けます。
体験に裏打ちされた知識は、智恵に変わっています。
行いがあって初めて、自分の指針が明快になるのです。
私はホテルへ泊まる時にはいつも、部屋を出てから非常口まで右又は左へ何歩だと調べ、実際に非常扉を開けて、外階段に通じているかをチェックしています。
そして夜寝る前には、それを想像して寝るようにしています。
生活習慣の中にしっかり入ってしまった知識は、智恵と言って良いでしょう。
それが人様にも紹介できる源となります。

「知行合一」を実践していると、回りの人にも自然と役に立つものになって来ます。
智恵の発露は、必ず人様の役に立つ、そしてパワフルなエネルギーが生まれると信じています。

これからの日本を、アルゼンチンとペルーの視点で見ましょう。
今私共が日本の中で、日本人として生きています。
果たして日本人とは、どういう民族なのだろうか。
今私たちは一所懸命生きているつもりだけれど、今の生き方で良いのか。
これから日本はどう変わるのか。
そういうテーマを考える時に、安岡干支学で考えてみます。
60 年サイクルで歴史を見るという視点です。
60 年前の日本を調べる為に、私は国会図書館へ行って、60 年前の新聞を見ました。
朝日・読売・毎日・日経・東京の 5 紙がありました。
中斎塾準備フォーラムが始まって半年経ちましたが、実際に国会図書館に行ってみた人はいらっしゃいますか？
インターネットで、昭和 21 年 2 月 17 日付けの新聞をチェックした方はいらっしゃいますか？
私の話を聞いているだけでは、知識にすぎません。
自分で行動に移すと、必ず何か心の中に残ります。
ぜひ皆様もご自分でお調べ下さい。
60 年前の日本は何があったか・・・。
何度も申し上げますが、ペルー・アルゼンチン・ロシア・・・60 年前の日本と同じ事が起きていました。
ある日突然、自分のお金が銀行から下ろせなくなりました。
ただし一世帯あたり 1 ヶ月間でこれだけは使ってよい、という金額がありました。
金融緊急措置令です。
それから食料緊急措置令が出て、食料も統制が始まりました。
地方から都会に来ると都会の食料がなくなるから、都会に来てはいけないという、都会地転入抑制緊急措置令が出ました。
凄まじいインフレが起きて、お金が下ろせなくなり、食べ物も手に入らなくなって、あちらこちらに出かけることも禁止されたという事です。
然るに税金は、どさっとかかりました。

富裕税は最高税率 92%でした。
それが 60 年前の日本です。

そして現在はどうか・・・。
少しずつ起きていますね。
これからどうなるかについては、ネバダレポートの視点でみてみます。
ネバダレポートについては、何度もお話ししていますので、参考にして戴きたい。
日本が経済破綻を起こした時には、日本にお金を提供して、経済を再生する為にどういう手段を用いるか、どういうふうにすれば日本の国が再生できるかという事を、ＩＭＦと日本の官僚が一緒に考えて出来上がったシナリオです。
当時の柳沢金融担当大臣が、国会で答弁をした時に明らかにしたものです。
既にいくつか取り込んで動いていると感じています。

そこで私は、最近国家破綻した国はどうなったのだろうか、どうやってその国の人達は生き延びたのだろうか、氣になって仕方がありませんでした。
それでロシアを見に行ったのが、数ヶ月前です。
先月 11 月末から 12 月初頭にかけて、アルゼンチンとペルーを回ってきました。
ブラジル・ペルー・アルゼンチンの治安も含めて、その話を致します。
アルゼンチンでは、或る日系人の方達が昼食会をして歓迎してくれました。
そこの会長さんが、
「深澤さん、なぜ歓迎会を昼にしたか分かりますか。私が住んでいる所は、ブエノスアイレス市から 1 時間ほど離れた郊外なので、夜真っ暗な中を 1 時間かけて帰るのは、物騒でできないからです。」と言われました。
夜になったら、怖くて外出できない。
やはり治安が相当悪化していました。
その方の家族は、皆一人ずつ泥棒の被害に遭っていて、家も空き巣に入られたそうです。
その後ブラジルに行きました。
ブラジルの人は「アルゼンチンは治安が良い。ブラジルから見ると天国みたいです。」と言いました。
ペルーでは夜食事に出ましたが、ガイドの方から
「この間もお腹を刺された人が出ましたから、くれぐれも注意して下さい」と言われました。

これらはどうしてそうなったか。
食べられないからです。
お金がまともに入らなくなったからです。

国が借金体質で破綻をした場合には、こういう道を辿る事になります。
国が破綻をする時に国民が味わう事は、先ず、自分の国が借金体質でどうにもならないという事を実感するわけです。
日本は、国が稼ぐ金額の倍の借金をしています。
ところがロシアやアルゼンチンは、国の稼ぎ高の半分くらいの借金で潰れています。
本来であれば、日本は潰れていて当たり前です。
ですから、＜借金がかさんで首が回らないようだ＞と国民が感じ出した所で第一歩です。
その結果、凄まじいインフレが起きる。
お金の価値が見る見る落ちていきます。
アルゼンチンは 2001 年の時で 5000%のインフレでした。
朝お給料を貰ったら、すぐに買出しに行かないと、晩にはもう通貨価値が落ちているからパンが変えなくなる。
これがハイパーインフレです。
そこへ行き着くと、デノミが始まって通貨価値が変わります。
そこまで来ると、次には預金封鎖になります。
ある日突然、現金が下ろせなくなるわけです。
アルゼンチンで会った人は、かなり専門家でしたが、預金封鎖があるという噂が出始めてから、封鎖になった瞬間に銀行に行ってお金を下ろしたそうです。
最初は 1 日 1 回、何千ドルか下ろせたそうです。
下ろせる金額がだんだん少なくなって、1 日 100 ドルになり、毎日奥さんと手分けして 100 ドルずつを下ろしたそうです。
又、銀行間の移動が最初は出来たので、預金をいくつもの銀行に振り分けて、毎日 100 ドルずついくつもの銀行を駆けずり回って下ろして歩くわけです。
そうやって、かなりのお金を下ろす事が出来たそうです。

ロシアの人達はどうやって生き延びたのか。
大多数の人達は、申請すると政府から郊外に土地を分けて貰えました。
そこに掘っ立て小屋を作り、そこで芋などを家族総動員で作って、親戚や知り合いにも分

け、お互いに助け合って生き延びました。
　それから、もともとの農家の人達は生き延びました。
　ドル預金のできた高級官僚や政治家も生き延びました。
　これらがロシアの生き延びた人達です。
　ただ、死んでいった人達がどれくらいいたか氣になって仕方がありませんでしたが、ロシアでは分かりませんでした。
　現地の人に聞くと、「もの凄く死にました・・・」という話でした。
　食べ物がなくて餓死状態でウォッカをあおって、陶然として死んでいったそうです。
　食べ物のない地域からモスクワへ、ここ 2、3 年で 300 万人の人が移ってきたという事は、現地に行って分かりました。
　専門家がデータを分析して調べた所、ソ連からロシアになって飢餓状態で死んでいったと思われる人々は、約 3000 万人であろうという事でした。
　マスコミの発表はありません。
　出かけて行って自分で実感したのは、1000 万人以上は亡くなっているなと思いました。
　それでアルゼンチンに行こうと思ったのです。

　アルゼンチンに行きましたら、中小企業の経営者は結構困窮していました。
　ただロシアに比べると死んだ人は、非常に少ない。
　ほとんどは生き延びました。
　なぜならば、食料が豊富だからです。
　ただ中流といわれる人達が、ほとんど下流に移ったようです。

　このあたりを日本に当てはめてみると、国家破綻をしたら、我々の暮らしがある日突然、多分 10 万円以下になります。
　そうすると、先ほど申し上げたアルゼンチン・ロシアがどうなったかをみれば、一つの仕事では食べられないから、二つから三つの仕事を掛け持ちするようになる。
　普通に戴いたお給料では、家族が養えない。
　一つの仕事では飯が食べられないから、二つ三つの仕事をする。
　それでも食べられないから、泥棒をする。
　麻薬が氾濫する。
　メチルアルコールを飲んで、陶然としてあの世へ行く。
　・・・これが最近国家破綻をした国々の実態でした。

日本がいつそうなるかわからないという危機感を、私は強烈に持っています。

現地行って具に見てくるという事は、「知行合一」の「行」です。

現地の体験をした事によって、今まで持っていた知識が智恵に変わって、行動する指針が生まれてくる。

智恵とは行動する指針であると言えます。

ですからそれを今皆様方にお話する事によって、私も再度確認ができ、皆様方も“行動してみよう”という氣持ちが生まれて来るのだと思っています。

行動を促すパワーがここから生まれてくると私は確信しています。

日本はそういうものを世界に向かって発信すべき、発信しなければならない、良い智恵を持った国です。

他の国々、特にヨーロッパ文明圏に属する国々は、どんどん悪くなっていく廻り合わせですから、もっと落ち込んでいきます。

東洋は、だんだん良くなっていく廻り合わせの国です。

或る史学の視点では、約１千年周期で物事を見ると、今は西洋文明が衰退し、東洋文明がこれから発展していくという大きな周期の真っ只中だといいます。

特に日本の場合干支学で見ると、まだどん底でまだ落ちるけれども、完全に底に着いたと同時に、又ぐっと伸びて行く。

東洋を引っ張っていくものの考え方は、＜足るを知る＞という考え方です。

この東洋の考え方、我々は陽明学の観点でもう一度よく見直しして、掘り下げて自分の智恵にして戴いて、まず自分自身、そして家庭、会社、組織ひいては日本の社会に役に立つ動きになると思います。

是非ご一緒に進めていきましょう。

有難うございました。

＜十牛之図＞解説

本日は十牛之図の（4）「得牛」の説明を致します。

今迄のおさらいをします。

（1）「尋牛」

「たづねゆく　みやまの牛は　見えずして　ただ空蝉の　こえのみぞする」

自分がどういう人生を送りたいか、考え出した時が尋牛です。

（2）「見跡」

「こころざし　深きみ山の　かいありて　しおりのあとを　見るぞうれしき」

志を本氣で立てたという事は、もう既に一流の人物になったと陽明学では解釈致します。

まず志を立てる事。

志を立てると、良い本を読みたくなる。

良い話を聞きたくなる。

ただ知識だけでは終わらないで、実際に体験したいと思うようになります。

良い本を見つけたり、良い話を聞いたり、そして出かけて行って、「なるほどな」と思う体験を重ねる。

自分でふっと氣が付いて「今、良い体験を重ねているな・・・」と、しみじみ思う時間がある。

そういう状況になった時を「見跡」と言います。

（3）「見牛」

「吼えけるを　しるべにしつつ　あら牛の　かげ見るほどに　尋ねきにけり」

何となく「これでよいのか・・・」と迷いながら、多分そうだろうと思い歩いていた道が、「それで正しいのだよ」と力強く後押しをしてくれるような師匠が現れる。

本を読んで、「この道で私は間違っていないのだ」と心の中に嬉しさやワクワクする氣持ちを持てるようになる。

「私はこの道で良いのだ」としみじみ思えた時は、自分の人生観がこれで間違いないと確信できる。

そう確信できた時が「見牛」です。

（4）「得牛」

「はなさじと　思えばいとど　こころ牛　これぞまことの　きづかなりけり」

「師匠はこの人だ」、「自分の座右の銘はこれだ」、「この本は一生涯付き合いたい」・・・そう思ったら放してはいけません。

生きている間はずっと、その良い本・良い師匠・良い座右の銘を放さない事です。

本を読んでいる時には納得して、これで行こうと思うけれども、本を読まなくなって 2、3 ヶ月経つと、何となく「これで良いのかな・・・」と不安になる。

或いは師匠だと思った方が亡くなってしまう。

亡くなって 2、3 ヶ月経つと、「果たしてこれで良かったのか・・・」と不安になってくる。

しかし一度捕まえた道筋は、そう簡単に手放さないですみます。

時々自分で見直しをしてみる事です。

自分の得た手がかりはこれだと、何度も何度も見直しをする時が「得牛」です。

自分が迷った時に、戻る事のできる原点があるかどうか。

その手がかりを持っていると確信できている人は、間違いなく「得牛」の段階に入っています。

以上、本日は十牛之図の第四段階「得牛」解説致しました。

有難うございました。